

# 尾瀬ネットワーク通信

2005年2月20日 VOL8. 1(22) NPO 尾瀬自然保護ネットワーク

## 湿原保護の基本を確認

### —群馬側入山指導報告—

★ 本年度の群馬側入山指導は、6月19日(土)9月25日(金)の2回実施しました。

参加者は

6月 清水博之、長島睦世、深山美子、坂本敏子(4名)

9月 高橋喬、佐藤信良、横田有弘、椎名宏子、長島睦世、深山美子、坂本敏子、前田悦子 他1名(9名)

2回共、並木駐車場及び鳩待峠でコース説明、湿原状況の解説を行い、鳩待峠から牛首の休憩スペース間では自然解説、ごみ拾いなどを行いました。



尾瀬ヶ原での入山指導風景(H16年9月)

★ 6月はちょうどワタスゲの最盛期でしたが、晩霜の影響で無残に枯れたミズバショウが目立ちました。ハイカーの姿もまばらで、解説をするチャンスもあまりありません。そんな状況の中で、ボッカの若者がごみを拾う場面を目撃しました。大荷物を背負った姿が、湿原に無造作に投げ捨てられた小さい紙くずを拾うために、わざわざ木道の縁に腰をおろし身をかがめる様子は、その周辺にいた人達に強いインパクトを

与えました。

★ 9月の活動時期の原は明るい草もみじで、エゾリンドウの青紫がひときわ鮮やかでした。晴天にもかかわらずハイカーは少なく、各自20部ずつ持ったリーフレットはあまり減らず、ビジターセンターでお借りしたごみ取りバサミも、出番はわずかでした。

2回の活動を通じての感想としては、入山者減少(今年度は24万6千人)の実感。ごみ拾いは大切な活動であることの確認。そして池塘周りの踏み固めが以前より目についたことを挙げておきます。踏み固めについては、ハイカーに注意を促すのは勿論ですが、何と言ってもビジターセンターの積極的な対応が効を奏すると思われます。

平成17年度は福島側の活動と連携して、6月に一斉クリーン(ごみ拾い)作戦を行うことが計画されています。みな様ぜひご参加下さい。

(群馬側担当理事 坂本 敏子)

## 平成16年度入山指導を終えて

### —福島側入山指導報告—

★ 本年度の福島側入山指導は、5月~10月の間、6回実施しました。

参加者は

第1回(5月28、29、30日) 磯部義孝、坂本敏子、佐藤信良、武繁春、深山美子(5人)

第2回(6月11、12、13日) 磯部義孝、坂本敏子、佐藤信良、島上健、田中志朗(5人)

第3回(7月16、17、18日) 高橋喬、武繁春、椎名宏子、佐藤信良、大橋文江、棚橋収(6人)

第4回(7月23、24、25日) 佐藤信良、島上健、牛木一朗、本戸信男、大田繁三(5人)

第5回(9月18、19、20日) 磯部義孝、佐藤信良、武繁春、深山美子、横田有弘、初谷博、伊東アケミ(7人)

第6回(10月9、10、11日) 高橋喬、坂本敏子、佐藤信良、若松真(4人)

★ 会津バス添乗解説の活動が始まって既に7年が経過し、会員それぞれの個性を生かした解説はベテランの域に達している。この間、尾瀬の様子も変わり沼山峠休憩所前のテラス新設や、登山口から大江湿原への木道の整備等が進んだ。



今年も可憐なミズバシヨウに誘われる様に活動を開始したが御池休憩所はテラスの新設等の改修工事が施工されていた。7月初旬工事完了。トイレは地下から1階に移設され、バリアフリーとなり利用者に喜ばれている。工事期間中も添乗解説や、尾瀬ネットワーク専用の案内所で活動を続けた。休憩所は「山の駅」と名が変わった。

会津バス車中で添乗解説中の棚橋指導員

★ 7月16日(金)は(株)日本旅行協会(JATA)米谷寛美理事を代表とする3名の方々と、ひのき屋で会合を持った。高橋理事長が今回の助成の礼を述べた後、主幹の中尾氏から我々の具体的活動の詳細について説明を求められた。翌日、JATAの方々は理事長が添乗解説したバスに同乗し、そのあと椎名さんの案内で尾瀬沼を巡り、視察を終え帰路に就かれた。

★ 7月24日、入山者は素晴らしいキスゲの群落を楽しみに来たが、今年は霜のため開花したキスゲの群落が殆んど見られず、寂しい大江湿原だった。

★ NPO法人格を取得したことで催した記念の只見川源流研修は、添乗解説に役立つ貴重な体験だった。翌日研修を終えたばかりの初谷、伊東両氏と横田氏が初めて解説のバスに同乗し先輩諸氏の活動をつぶさに見聞した。今後の活動に期待がもたれる。

★ 台風22号の影響で最終回の参加者は少なかったが、草もみじと紅葉を眺め疲れが一気に吹き飛んだ。参加会員延べ59名、バス添乗解説は自然保護を入山者に訴える有効な活動の場であるが、それを提供してくれる会津バスのご

協力を忘れてはいけないと思っている。

お世話になったひのき屋の皆さんとお互いの健康を願い、再会を楽しみに全ての活動を終え安堵感を味わい帰路につく。

(福島側担当理事 佐藤 信良)

## 指導員養成講座を終えて

今年度から指導員養成講座の実施方法を大幅に改めました。研修は2回に分けて参加しやすく、無理のないコース設定としました。

- ★ 室内研修：7月24日午後、東京「ジャンダルム」
- ★ 現地研修：8月20日～22日、アヤマ平・尾瀬ヶ原
- ★ 受講生：男性8名、女性2名、平均年齢は58歳
- ★ 講師：高橋理事長、永島勲、磯部義孝、松前雅明、椎名宏子
- ★ 受付窓口：椎名事務局長
- ★ 宿舎：富士見小屋、戸倉「一仙」



H16年8月20日(金)風雨のアヤマ平で研修

現地研修の初日は雨、強風のなかアヤマ平の湿原回復状況を学びました。昔の山小屋の雰囲気が残る富士見小屋ではストーブを囲んでご主人の萩原始さんから尾瀬に関する貴重なお話を聞くことができました。翌21日は好天の中、尾瀬ヶ原を縦断しながら実施研修を行いました。最終日は群馬側の入山口「富士見下と大清水」を視察、戸倉の史跡を見学しました。一仙での終了式をもって全課程が修了し、新たに10名の「尾瀬自然保護指導員」が誕生しました。

この養成講座では「尾瀬の自然とその保護」や「自然の見方」等の基礎を学んだに過ぎません。修了証を手にしたときの感動を忘れずに、

今後は入山指導等の実践活動に積極的に参加して、指導員として更なる知識の向上と経験を積んで頂きたいと思います。

最後に、受講生募集を掲載して頂いた「山と溪谷社」、室内研修会場提供の「ジャンダルム」及び現地研修宿舎の「一仙」や「富士見小屋」など、多大なご支援を頂いた関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

(養成講座担当理事 永島 勲)

## 養成講座終了者の感想文

### 指導員としての取り組んでみたい活動

東雲 明  
都内での講習、現地での実地研修を終えて、尾瀬自然保護保護指導員としての実感が湧いてきました。今までの単なる一般入山者としての尾瀬と違って、幹部の方々に引率していただき、現地で説明を受けての尾瀬は、やはり違った点も見えてきて、また問題点もよく理解できました。

様々なご意見もあるでしょうが、私は、「尾瀬は保護しつつ利用すべき」と思っております。尾瀬の保護だけを考えると、全面立ち入り禁止にすればよいのですが、それでは自然との共生にはなりません。一部には至仏山東面道のように通行禁止の箇所も設け、シャトルバス代・駐車代・山小屋代に入山料を上乗せして、その資金を尾瀬の保護活動費に回すべきと考えます。30万人の入場者数に、一人100円を負担してもらえば、総額は3,000万円となり、或る程度の活動費になると思います。

私自身が取り組んでみたい活動は、必ずしも活発な更新をしているとは言えない「ネットワーク」のホームページ管理のお手伝いをして、少しでも外部の方々に、ネットワークの活動をPRして、尾瀬自然保護の必要性の理解者を増やしたいと思っております。未熟者ではありますが、今後とも宜しくお願い致します。

### 尾瀬に恩返し

初谷 博

7月24日、真夏の土曜日、きらきらと街路樹から光がこぼれる昼下がり、ビル街の小さな入り口から始まりました。2階に上がると、いかにも同好会の集会所といった雰囲気です。すでに10人以上の受講生が集まっておりました。

老若男女、都会のど真ん中で、しかも普段着なのに、山のベテランの貫禄がにじみ出ているのは不思議でした。

尾瀬自然保護ネットワークの存在を知ってから1か月足らずで、しかも入山回数が7回程度の自分ではまずかったかと、反省しても時すでに遅し。自己紹介の順番が回ってきた。

思い返せば、約30年前の学生時代にはじめて尾瀬を訪れ、その後、友人と、同僚と、妻とそれぞれ同行者は変われど、いつも温かく迎えてくれたこと。最近の5年間は仙台に単身赴任していたこともあり、北海道の大雪山系、東北の名山を登り、たくさんの思い出と元気を頂いたこと。

55歳を迎えるに当たり、現役を残すこと5年の間に準備するものの一つとして、ボランティア活動でした。10年前に日本リクレーション協会の余暇生活開発士の資格を取って以来、具体的な活動をしていなかったが、ここに定まりました。

今までに、山、海、川の自然からたくさんの贈り物を受け、またそれが失われつつある現在、尾瀬に恩返しをしたい気持ちで参加しました。

8月20日、台風一過の晴天を期待したのですが、鳩待ち峠は霧雨でした。受講生全員が無言で雨具を着けて、実技研修が始まりました。

講師の説明を聞きながら、ダケカンバを中心とした広葉樹林帯を抜け、オオシラビソの針葉樹林帯に入りました。今までは頂上に登ることや、目的地に早く到着することのみで、こんなに周辺の植物に気を払ったことはありませんでした。また、木道に残された動物の糞も観察の材料になること。初めて知ることの多さに驚きました。

指導員としての心構えを醸成することと、知識を習得することの大事さを実質2日間で学びました。いずれにしても指導員の見習いとして活動に入るわけですが、定年を迎える5年後には一人前になるよう、努力いたしますので、よろしくご指導ください。

### 指導員としての今後の決意

加藤 憲司

NPO 尾瀬自然保護ネットワークに対する感想は、入会以前と養成講座終了とでは、全く異なるものとなりました。

第一に、講師の方々の自然保護に対する姿勢が立派なこと。また、地についての活動力と尊敬

できる人格により、私の自然保護に対する対処を、一から出発することを認識いたしました。

第二に、今後3年から5年くらい、諸先輩の指導により地道な日常活動を、一步一步確実に実績を積み重ねて、初めて自然保護を世に問う端緒になるのではないかと感じる次第です。その対応として①当会の活動に、出来る限り参加する。②尾瀬の自己研修に努める。③会員諸兄とのコミュニケーションに努める等努力する。

第三に、その上で、その期間に自己の活動の方向が見えてくるのではないかとと思うのです。

現在、私は67才です。光ある活動もせぬうちに、来世に行くやもしれません。が、まだ現世で光ある活動出来るやと信じる次第です。どうか、諸先輩の指導のもと、一匹の働き蟻となって当会の目的に微力を尽くしたいと決意した次第です。

尾瀬、特に尾瀬の湿原は40回近く入っておりますが、いつ来てもこのさわやかな空気、風、は表現の出来ない心地の良い、心身を洗い清められる、そのように感じます。これは、古来そのままの自然だからこそ、現在があると思います。破壊は、いつでも簡単にできる。その盾となって、古来あるがままの尾瀬であるように。

### 尾瀬初入山の樹徳高校生から感想文(つづき)

#### 尾瀬に行つて

茂木 雄輔

尾瀬に行く前、僕は、尾瀬はよく写真で見ると、草原に木道が通っているような所がたくさんあるだけだと思っていましたが、実際に行ってみると、尾瀬には、森林があり、岩だらけの山もあり、沼もあるのだということが分かりすぎて驚きました。

また、植物の種類もたくさんあり、僕の知らない野草がほとんどでした。僕の住んでいるあたりでは見られない珍しい野草があるなんて尾瀬はやっぱりすごい所だなと思いました。

尾瀬の夜は、とっても星がきれいでした。やはり町でみる星とは違って見えました。また、月の光がとても明るい事にはじめて気がつきました。夜の霧はとても神秘的で、霧で月が隠れた時のぼやけた光にはとても感動しました。

山小屋で一番驚いた事は、ゴミ箱がひとつも無いということです。これは、ゴミが出たら必ず持ち帰るというルールがあるからではないでしょうか。

このように、尾瀬では美しい自然を守るために、いろいろなルールがあります。このルールを守って20年後、30年後も、尾瀬の美しい自然が見られるように人間が努力しなければならないと思います。



至佛山荘前にて田中指導員と

#### 尾瀬に行つて・・・

周東 和男

自分は今回も含めて二度尾瀬に行きました。一度目は中学生の時に行き、その雄大さに感動したのを覚えています。そして今回、一度目の時が丁度水芭蕉の良い時期だった為、昼間での感動は半減してしまいましたが、一泊ということで夜の尾瀬、早朝の尾瀬の二つを体験し、その時得た感動は、半減した分を補うどころか一度目の2倍、3倍以上の感動を与えてくれました。ポツリ、ポツリと命の光を灯す螢、幻想的に青く光り人工の光など必要ないほどに輝く月、この光を受けて青白く漂う霧、今では見たことがない人がいる程までに珍しくなってしまった天の川、それら全てが織り交ざりまるで日本神話に出てくる神々の住む国、天つ国のようでした。

かつて、尾瀬を貯水池にする計画があった事が信じられない程の感動を得ました。しかし、これでは「一を見て全てを見ず」。もともと、自然や太古の人々が作り上げた美しい物に魅せられていた自分は、これを機にすこしずつでも尾瀬のような所へと赴きたいと思いました。

完

一泊二日の行程で尾瀬・至佛山を体験した桐生、樹徳高校生7人の感想文を全て掲載しました。顕著な間違いを一部修正したほかすべて原文のままです。

全編に文章の巧拙、舌足らずな表現など幼さ

も見受けられますが、純真な心で感じた自然への憧憬、魂をゆさぶる感動が行間に脈打っています。

こうした「尾瀬」の体験を全国の児童、生徒に与えられる機会が少しでもあれば、「自然保護」思想の育成という観点からだけでなく、青少年の非行防止にもかなり役たつものと思われる。

編集担当

### 世界遺産・東南ア最高峰 キナバル山登頂報告③

(2004年2月21日)

下山を開始してロウズ・ピークを振り返り、別れを告げたが、遠い異国の同じ山に2度と登ることはないだろうと思うと



主峰ローズ・ピーク(4095m)山頂で。  
左はガイドのソピーニさん

柄にもなく感傷的になる。

ロウズ・ピークを離れてしばらくすると、一人で登ってくる男がいた。ガイドと現地語でなにやら話をしていたが、われわれが歩き出すと後ろについて来るので、ソピーニ氏に聞くと、レインジャー・スタッフとのこと。ほとんどのパーティが下山する時刻になったら、こうして登ってきて、最終パーティと下のサツサツ・ハットまで下山する役目。こういうきめの細かい管理をしている。ベテランのガイドが付いているのだから、といった手抜きはしないのだ。手にビニール袋を持ち、ごみがあれば拾う。ガイドもごみ持ち帰りが義務づけられているとか。そのため、尾瀬と同様に、ごみはほとんどなかった。

下りでは白いロープが役に立った。とくに

数メートルほどトラバースする難所が2~3カ所あったので、たいへん助かった。

当初の予定では、下山後は山小屋にもう1泊することになっていたのだが、オプションでキナバル公園の一角にあるポーリン温泉と、ジャングルの中のキャノピー・ウオークを希望するメンバーが多かったため、ラバン・ラタ・レストハウスで昼食後、登山ゲートまでの6kmを下山することになった。今度は当然、急な下りの連続になり、両足の親指の爪が内出血し、下山してみると壊死して真っ黒になっていた。

この日の午後は、山小屋からロウズ・ピークまで往復6kmと、山小屋から登山ゲートまでの6km、合計12kmを歩いたため、登山ゲートで車が待っていたときは、地獄で仏の心境だった。

登山ゲートで再びIDパスのチェックを受け、途中、公園管理事務所に寄って「登頂証明書」を貰った。ガイドの証明がないと貰えないのでごまかせない。ただし、希望すれば「あなたはキナバル山の何メートル地点まで登った」という、こちらはモノクロの証明書を出すとか。

下山後はキナバル公園の周辺にある「マシラウ・ネイチャー・リゾート」(2000m)ロッジに宿泊。

(2月22日)

翌22日は、ポーリン公園内の「キャノピー・ウオーク」へ出掛けた。

ゲートを入れてすぐの所に、「撮っているのは写真だけ」の立派な石碑が建っていた。ゲートから30分ほど歩いてキャノピー・ウオークへ。ここの入場料は5RM(約150円)で、カメラを持っているとさらに5RM、ビデオカメラならさらに30RM(約900円)支払う。

キャノピー・ウオークは、高さが60~70mあるフタバガキ科の大木の樹高40mの所に、人ひとりがやっと通れるほどの狭い吊り橋が延長158mにわたって架けられている。熱帯雨林を上から見ようという試みで、もともとは動植物の専門家が、簡単な板掛けを設けて自然観察用に考案したものという。ジャングルに棲む動物か野鳥にでもなった気分だった。

再びコタ・キナバルに戻って1時間ほど市内見物をした後、ホテルで仮眠。22;00

に空港へ。23;30発のマレーシア航空で  
23日7;00に成田に帰着した。

(おわりに)

今回のキナバル山行きで痛感したことは、一言で言えば、世界遺産とか国立公園というものの管理・運営がいかにか大変で、いかにおカネも手間もかかるかということだった。

日本に国立公園は28カ所あるが、入山者のチェックを海外ほど厳しくしているところは、おそらくないと思う。もちろん、国情の違いがあって、現在の日本ではキナバル山のような労働力は得られないし、また、職業としても成り立ちにくい。しかし、職業として成り立つ程度の報酬が得られるとしたら、事情は変わってくるし、ひいては国立公園での自然保護の在り方も変わってくるのではないだろうか。

それには、海外の国立公園が行なっている入山料の徴収や、有料ガイドの同行を義務づけることが手っ取り早いと思う。かつて、故大石武一氏らの尾瀬を守る懇話会が昭和63年に、尾瀬で入山料を徴収し、環境保全の財源に充てることを提言して環境庁(当時)に申し入れたことがある。これに対して、「総務庁に打診したところ好ましくないとの意向だった。また、国立公園法の改正も必要になる」というわかったような、わからないような回答だった。

キナバルでは入山料とガイド料で約5,000円支払ったが、けっして高いとは思わなかった。整備された登山道や休憩所、トイレ、標識、ごみの収集などを考えれば、維持費を利用者が一部負担するのは当然と思えてくる。

ひところ、「尾瀬も世界遺産に」とささやかれた。昨年、吉野熊野国立公園が世界遺産になったが、数年前に熊野古道を歩いた頃も、登山道やトイレは整備されていたし、山中に古くからの茶屋はあっても、売店などはなかった。それに比べて、わが尾瀬は世界遺産どころか国立公園さえ返上したいくらいで、整ったのはデラックスなトイレだけ。利用させる側も、利用する側も意識の改革が求められていると思う。

(完)

(高橋 喬)



## 残雪期利用状況を調査したい

最近、歩くスキーとかスノーシューによる雪上トレッキングがブームになりつつある。中高年者にとってスキーはともかく、スノーシューは実際にやってみて確かに面白い。

これは単に雪の上を歩くだけだが、某大手旅行会社が5月1, 4, 7日に山ノ鼻から見晴を往復する1泊2日のハイキングと、1, 4日に丸沼高原に1泊して翌日至仏山に登るツアーを計画している。

心配なのは白一色の世界なので、木道を踏みはずしたり、池塘に転落したりする不測の事態が起こることである。また、尾瀬の山小屋などに貸しスキーや貸しスノーシューが登場したら、近い将来、残雪期の利用が増加することが懸念される。現地調査してみたい。

(高橋 喬)

## 2005年度定期総会開催のお知らせ

会員の方々には別途、お知らせ致しますが2005年度の総会を下記の日程で開催致します。会員の方は是非、ご出席いただき活発なご発言をしてくださるようお願い申し上げます。

日時：4月16日(土) 13時より

場所：大宮ソニックシティ会議室

至仏山東面登山道の調査報告書がJATAの助成を受けて製作中です。永島さん始め皆様の協力のおかげと感謝しております。

総会当日、皆様にお渡しできると思います。総会当日は

年会費：3,000円

保険料：1,500円

ご持参ください。

(事務局長 椎名 宏子)

NPO 尾瀬自然保護ネットワーク

〒100-0014

東京都千代田区永田町2-17-5-203(株)SEC内

電話 03-3851-0321/FAX03-3581-2178

<http://homepage.mac.com/ozenet/>

理事長 高橋 喬

事務局長 椎名 宏子

編集担当 若松 真・島上 健